上智大学経済学部　同窓会会報　エコノミアン
ECONOMYAN VOL. 64
◆発行日／令和5年4月25日　◆発行／経鶯会 千代田区紀尾井町7-1 上智ソフィア会内 ◆編集／広報委員会　編集長 大武宏至（1978経・営）
www.sophiakai.jp/blog/economyan/

経済学部の新たな取り組み

経済学部長　竹之内 秀行

2023 年 4 月より、経済学部長を務めております竹之内秀行と申します。微力ながら、経済学部の発展に尽力したいと考えております。

経鶯会の皆さまからは、学部の講義や講演会の開催、経鶯会奨学金など、さまざまな面で多大なご支援をいただき、誠にありがとうございます。感謝の意を込めまして、経済学部の取り組みと経済学部の現状について、3 点ご紹介させていただきます。

SPSF プログラム・英語特修プログラム

経済学部では、英語特修プログラムと SPSF プログラム（Sophia Program for Sustainable Futures）という、2 つの英語によるプログラムに取り組んでおります。

ここでは、SPSF プログラムについて、お話しさせていただきます。SPSF プログラムは、2020 年度秋学期に経済学科からスタートし、2022 年度秋学期からは経営学科においてもスタートしております。このプログラムは、新聞学科・教育学科・社会学科・経済学科・経営学科・総合グローバル学科が共同で実施する、学位プログラムです。すべての授業が英語で実施されており、現在、経済学科では 30 名、経営学科では 9 名の学生が在籍しております。

英語によるプログラムという点に加えて、もう 1 つの SPSF プログラムの特徴として、経済学・経営学に加えて、SPSF プログラムに参加している他学科の講義科目も学ぶことができます。このことは、環境問題や経済格差などの社会課題を解決する上で必要な多面的な視点の習得につながるものであります。

実践的な教育の実施

実務家の講師をお招きして、課題解決型の講義を実施しております。春学期には、上智大学と香港中文大学による連携講座「Challenging Frontline Issues in Global Business」を開講いたしました。同プログラムは、3 年目となっておりますが、昨年度は、Covid-19 の影響もあり、オンラインでの開講となりました。オンライン講義の中で、香港中文大学と本学経済学部の学生が混成チームを作り、グループワークに取り組みました。こうした新しい協働の形は、グローバル化の進む中での異文化体験としても重要な学びになっています。

このほかにも、経済学部では、さまざまな企業との連携講座を実施しております。それらの連携講座は、学生が大学での学びを社会との関係の中で捉えなおす、貴重な機会になっております。

オンライン講義とオフライン講義の融合

最後に、Covid-19 のもたらした大学の講義の変化について紹介させていただきます。Covid-19 は、私たちの生活に大きな変化をもたらしましたが、それは大学においても同様であります。特に、学生にとって、大きな変化となったのが、オンライン講義であります。

オンライン講義は、先ほどの「Challenging Frontline Issues in Global Business」のように、時間や場所を越えた新たな講義の形をもたらしています。このような新しい講義の形は、学生にとってさまざまな知識を習得する機会をもたらしています。

おそらく、今後は対面講義とオンライン講義という 2 つのタイプの講義が組み合わさりながら、より柔軟性の高いカリキュラムがつくられていくものと思っております。そうした新たな形を、経済学部でも模索していきたいと考えております。

以上、3 点に絞ってご紹介させていただきましたが、今後も経済学部ではこれまでの伝統を守りながら、新しい形を模索していきたいと考えております。経鶯会の皆さまには、今後とも、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

「ソフィアンズ顕彰 2022」に選ばれて

川野克美（1958 年 経・経）

（顕彰式）

昨年の 10 月 8 日（土）、6 号館 101 教室にて秋季全国代議員会が開催され、その冒頭、上記の式典が行われた。今回は 13 名のソフィアンが顕彰され、私もその中の一人に推挙される光栄に浴し、恐縮した次第である。本件については、経鶯会会長の田村さんから事前に「本日の役員会で『ソフィアンズ顕彰者』に推挙する旨、決定したので、よろしく！」との連絡をもらっていた。後刻、ソフィア会鳥居会長から戴いた通知をみると、他の被顕彰者の顔ぶれは錚々たる方々で、ソフィアンズの層の厚さを物語っていた。

当日は卒年順にステージに上がり、鳥居会長から一人ひとりに賞状とエコロジー・クリスタルの記念の盾が贈られた。小生は「第 2 代経鶯会会長として・・・・」という推薦文で読み上げられ紹介された。一番先に指名されて登壇したので、13 人が済むまでのいささかの時間、壇上で昔の思い出や記憶のあれこれが蘇ってきた。

（美しき過ち）

講堂での式典といえば、私が入学した半世紀以上前の上智大学入学式でのこと。当時の大泉学長がフレッシュマンを前にして次のような話題から祝辞を始めました。「本日ここに列席の新入生の皆さんの中には東大など第一志望校を滑ってやむなく本学に入った者が多数いると聞いています。しかし、それは『美しき過ち』というものです。本学に入って良かったと思う日が必ず来るでしょう。」

この“運の良かった落第”に納得した人生を送った人がソフィア卒業生にも大勢いることでしょう。入学式の時は「美しき過ち」を原語でも表現

前列左端筆者

していたので、ある時、そのうろ覚えの原語について出典を知りたくて、当会副会長の福田順子さんにそれとなく話したところ、学者の彼女はなんとソフィア・アーカイブスの大塚さんに照会して大泉学長の式辞原稿に当たってくれた。ところが、私の年次の入学式の原稿だけが欠落していたと聞き、本当に残念であった。福田さんは別途、文献調査で、古代ローマ詩人の『農耕誌』第 2 巻エピローグ「農耕賛歌」に似たような表現があると教えてくれた。お陰で読書する勉強の楽しみが一つ増えた。

（ビア・アーベント）

経鶯会は平成元年（1989 年）に経済学部 75 周年を契機に学部同窓会として組成された。初代会長の伍堂さんに口説かれて、私は 2 番バッターの会長就任を拝命した。当初は現役だったので時間の調整が大変だったが、役員諸氏の手助けでやりくりが出来るようになり、エコノミアン誌の充実や毎月の経鶯会サロンの実施など会員相互の交流活性化に努めた。OB 講座の進展もその一つである。

田中経済学部長（当時）にお会いした時、先生から「2 単位の『睡眠講座』を活用したいので、経鶯会で協力してもらえないか」との話があった。さっそくこの話に乗り、ちなみに、何人かの管理職以上の学部卒業生に電話し、「講師の件」を話してみた。趣旨は賛成、しかし時間が取れないという返事がほとんどで、結局、私が講座を埋めることでスタートを優先し、2 年越しの“にわか教師”となった次第。「特別講義（産業発展論）」が正式名称で、90 分授業、毎週 1 回延べ 13 回程度の

講義を前・後期にわたって行うこととなった。

私の場合は、90年代に入って巨額な「不良資産」のオーバーハングとその後のハングオーバーに至った銀行経営の軌跡を物語風に講義してみた。ある時は「そうなった時、君ならどうする？」と学生を指名してみたり、別の学生にはケースAとBとの運用利回りを計算して比較してもらうなどして、教室の“居眠り候補者？”を邪魔したりした。余談になるが、この時の講義録を基に『金融自由化戦略の帰結』（1995年、有斐閣）を上梓することが出来たのは望外の喜びであった。見知らぬ方々を含め、多くの読者から読後感をしたためた手紙をいただいた。

授業が終わると、毎回、数人の学生が質問をもって私のところへ寄ってくる。かくも熱心な学生達と直に話しあってみようと思い、94年正月には半蔵門のダイヤモンド・ホテルで新年会と銘打って学生達との交流会を開いた。私の職場の同僚が同ホテルに副社長として出向していたので、無理を聞いてもらい、賑やかなパーティとなった。学部長、学科長のご臨席をいただき、経鷲会からは前会長、副会長等の役員が10人ほど応援に駆けつけてくれた。学生諸君が目を輝かせて先輩とのフリートーキングに花を咲かせた光景が今も目に浮かんでくる。この時の学生参加者は、いまでは、それぞれの分野で大活躍してソフィアの名を高めていることと思う。

（第2代経鷲会会長）

ソフィア会　そして　経鷲会

本多義人（1961年 経・経）

今日　隆盛を誇るソフィア会にとって決して忘れてはならない大先輩達がいます。

昭和30年代初め当時の学長、大泉 孝神父（昭5文哲）の肝煎りでソフィア会の再構築と活性化に尽力された、遅塚世六氏（大10商、第3代ソフィア会会長）、小寺信夫氏（大11商）、青山高志氏（昭7商）、速水健太郎氏（昭10専商）、皆川伊之輔氏（昭10専商）、学内では宇田五郎教授（昭2文哲）、大泉 孝学長、戸川敬一教授（昭7文独）、品田豊治教授（昭10商）、山辺二郎学長秘書（昭20文独）の方々です。

当時在学中だった私は大泉学長の命を受け上記の方々間の連絡係、謂わば使い走りを務めたのが今日迄ソフィア会と深く拘わる事になった始まりです。

この度、経鷲会会長の田村さんから経鷲会設立の由来を書けとの仰せがありましたので甚だ雑駁ですが以下に記します。

＊＊＊＊＊＊＊

1988年初夏、品田先生より電話があり、その年の秋に行われる母校創立75周年の式典にできるだけだけ多くの経済学部卒業生に参加してほしいとの要請が当時の内野学部長からあったので宜しくとの事でした。又その際、上智大学は1913年に文学部7名と商学部5名の12名の学生からスタートし、75周年を迎えた今日、文学部には同窓会があるが経済学部にはないのでこの機に組織したらとの助言も頂きました。

品田先生は私が在学中所属していた硬式野球部の部長であり、又当時私がソフィア会常任幹事をしていた為恐らく私に依頼されたのだと思います。

そこで私は早速、同期の三好君、堀井君をはじめ知己のあった後輩の柳本信一郎君、池田賢吾君、秋元征紘君に声を掛け一同に会し二つのことに付いて相談しました。

その結果、式典への動員については同窓会年齢に達している比較的古い卒年の方々に皆で手分けして連絡し協力要請することとして、同窓会設立については式典の集いの場で皆の賛同を得てから発足してはとの事で衆議一致しました。

その後式典での呼びかけを中島貞夫氏（昭30卒、当時アッシクス社長）、大河原 毅氏（昭42卒、当時日本ケンタッキーフライドチキン社長）のお二人にお願いしその結果式典参加者の賛同を得ることとなりました。

それを受けて、翌年早々に設立準備委員会を組織し、それぞれ仕事帰りの夜学内の教室に集まり幾度かの会を重ねました。

委員会のメンバーにはその年新しく学部長になられた佐藤真一教授をはじめ、卒業生の緒田原先生、坂本先生、宇佐美先生、濱田先生、小林先生も加わって下さいました

こうして1989の春、伍堂光男氏（昭32卒）を

会長に、川野克美氏（昭33卒）を副会長にお願いし、そして名前を【経鷲会】と決めて経済学部同窓会が目出度く設立発足致しました。

以上、経鷲会の設立までの経緯を順を追って記しましたが何分にも古い事なので関係された方々のお名前の欠落や会合の時期等に多少正確さを欠いている点があるかもしれませんがどうぞご容赦ください。

この様にしてソフィア会も経鷲会も多くの先人達のおかげで今日があることに感謝して、今後、経鷲会が母校とソフィア会の大きな支えとして益々発展することを心から祈念致す次第です。

（元経鷲会会長・元ソフィア会会長）

後列筆者、前列左から大河原 毅氏、中島貞夫氏

「日本一クラシックギターのコンサートを聴いている男」の話

宮林　淳（1978年 経・営）

エコノミアンをお読みになっている皆さんの多くも、「ギター」と聞いてまず連想するのはおそらくはロックやフォークなどのポピュラー音楽、そして楽器はエレキギターやアコースティックギター（＝略称アコギ。弦は金属製でピックで弾く。別名「フォークギター」）で、「クラシックギター」（略称クラギだが“暗いギター”の意味ではない！弦はナイロン製でピックは使用せず指で弾く。別名「ガットギター」）をイメージする人は少数と思われる。

しかしそのいささかマイナーなクラシックギターに魅せられて、今や「日本一クラシックギターのコンサートを聴いている男」を標榜するに至った不肖・私が、その経緯を書かせていただく（以下の文面ではギター＝クラシックギターを指す）。

ギターはピアノ同様に1台で音楽の3要素であるリズム・メロディ・ハーモニーを演奏でき、多彩な音色の変化が可能で高度な音楽表現ができる楽器であり、ベートーヴェンは「ギターは小さなオーケストラ」と述べたという（逆にギターはピアノ同様にオーケストラを構成する楽器には含まれない）。

また独奏の他にギター同士や他の楽器との合奏・歌の伴奏・オーケストラとの協奏など幅広い演奏形態に対応する多様性がある楽器でもある。音量は小さいが、ストラヴィンスキーは「ギターは音が小さいのではなく、遠くで鳴っているのだ」という名言を残している。

私がそんなギターに興味を持ったのは中2の時（1970年）。「卒業生を送る会」でギターを弾いた同級生に感化されて親にギターを買ってもらい

（たしか 8000 ～ 9000 円）、当時 NHK 教育テレビ（E テレ）で毎週放映されていたお稽古番組「ギター教室」（後に「ギターを弾こう」）を視聴して独学した。

1974 年に上智大学に入学してソフィア・ギターアンサンブルに入部しギターも手工品に買い替えるが、思うところあってクラブは 1 年間で退部（しかし現在は何故かその OB 会の役員を務めているのだが）。そして 2 年次からはプロのレッスンを受け始め、それは 78 年に大学を卒業して東洋製罐（国内の缶で約 50%・ペットボトルで約 30% などのシェアを持つ総合容器メーカー）に就職してからの 90 年代半ばまで続いたが、私は次第にギターを“弾くこと”よりもギターのコンサートや CD を“聴くこと”や、ギターや音楽関係の書籍を読み漁る方向に傾倒していった。

出来眞君（経営学科同期）の結婚披露宴で
ギターを演奏する私（1982年／26歳）

そしてギターには、1967 年創刊で 56 年の歴史を持つ月刊「現代ギター」という専門誌があるのだが、85 年に私はその読者投稿欄への寄稿が編集長の目に留まったことを契機にライターとして執筆陣の一角を担うことになり、2017 年に東洋製罐を定年 +1 年で退職するまでは会社員との“二刀流生活”を送ることになったのだった。

その「音楽ライター」としては、ギターのコンサート評・新譜 CD 評・コンクールのレポートや特集記事の執筆、誌上座談会への出席やその司会、国内外の一流ギタリストへのインタビュアーなどを務め、95 年からは毎月のお薦めコンサートを紹介する「宮林淳の今月のみどころききどころ」を連載し、その他にも CD の解説文や演奏会プログラム解説の執筆なども行って現在に至っている。

年間のコンサート通いは会社員時代は 35 ～ 50 回ほど、2017 年に退職してからは 100 回ペースで、現時点の通算ではおよそ 1800 回ほどだろうが、これが「日本一ギターのコンサートを聴いている男」を標榜する所以である。ギターの LP は約 200 枚、CD は約 1300 枚を所持している。

海外ではメキシコ（1993 年／旧知のメキシコ人ギタリストのアテンドで彼が教授を務める音大での講座のアシスタント）、台湾（2001 ～ 2019 年に 5 回／世界の一流ギタリストが集まる台湾国際ギターフェスティバル聴講）、スペイン（2014 年）などに渡航したが、特にスペインでは、20 世紀最高の巨匠ギタリストたるアンドレス・セゴビアの生地リナレスで開催された「第 21 回セゴビア国際ギターコンクール」のゲスト審査員を務めたことは忘れがたい体験となった。

（音楽ライター／東洋製罐グループホールディングス OB）

1967年創刊の月刊
「現代ギター」誌

セゴビア国際ギターコンクール審査員のディプロマ

木藤まどか氏の講演会報告：津田梅子が日本に蒔いた「種」

木藤まどか

2022年11月12日（土）、14：00～15：30、上智大学6号館101教室で、経鶯会総会の後、女子部会の第5回勉強会も兼ねて、講演会を開催しました。テーマは、『津田梅子が日本に蒔いた「種」～日本初・最年少の女子留学生の生き方』、講師は、津田梅子研究の第一人者の木藤まどか氏でした。木藤氏は津田梅子研究で比較文化博士号を取得されています。

勉強会は3年ぶりという事もあり、外部も含めて約100名の聴講者があり、内容の深さ・情報量の多さ・女子教育の意味などに、皆、非常に熱心に耳を傾けられました。

以下は、講演者の木藤まどか氏にポイントをまとめていただいたものです。（福田順子 記）

木藤は、津田梅子という人物を紹介するにあたり、津田梅子が生きた時代背景にも触れながら、津田梅子を知る手がかりとなる人物や出来事について触れ、その足跡を辿った。

以下にその概要を紹介する。

津田梅子（以下、梅子）は、元治元年12月3日（新暦1864年12月31日）江戸牛込南御徒町[1]に生まれた。梅子が生まれた時代は、1853年のペリー来航に始まり、明治維新が目前に迫る、日本にとって激動の時期であったことがわかる。

梅子は、日本初の女子留学生として知られる人物である。出発時の年齢が満六歳であることから、少なからず両親の影響があると考えられる。

父・津田仙は、多才な人物であった。まず、英語の通訳者で、その背景には旧幕臣としての立場があり、これはのちに梅子とともに留学する女子留学生たちとの共通点としても注目すべき興味深い点である。農学者としては草分け的存在で、「キリスト教界の三傑」のひとりともいわれるキリスト教徒でもあり、教育者としては、学農社農学校のほか、青山学院・同志社・普連土女学校・東京盲唖学院など、現在にも続く学校の設立に尽力した。さらに、社会活動家でもあり、のちに公害問題の先駆けとして有名になった足尾鉱毒事件の問題に取り組む田中正造の運動にも参加していた。母・津田初は、夫の仙のような活発さではないものの、学校設立に協力するなど夫とともに活動し、家庭を支えていた。

1871年に日本を発った梅子は、その後10年余りの時間を米国で過ごすことになる。米国では、ランメン夫妻のもとで大切に育てられ、恵まれた環境で十分な教育をうけて育った。受洗（幼児洗礼ではない）したのも、留学の延長を願い出たのも、梅子自身の意思によるもので、子どもながらに国費留学生としての使命を自覚し、しっかりとした考えを持っていたことがうかがわれる。

1882年に帰国すると、梅子は米国人として遜色のない英語力と知性を身につけた分、日本語の壁のほか、出発時とは政府の方針が変わってしまったことによる女子留学生への冷遇、女性の地位が低い日本の現実に直面した。華族女学校などでの教職を経て、梅子は2度目の留学を決意する。Bryn Mawr College[2]に留学した梅子は、科学者としての能力が開花する。大学や一緒に研究をしたモーガン博士[3]からは大学に残ることを強く勧められたが、梅子は、日本で女性の教育のために力を尽くすという目標のために、帰国する決断をした。

私塾であることにこだわり、米国での支援者にも恵まれ、梅子は1900年に女子英學塾を開校し、開校式式辞では、優れた教員と意欲のある学生の存在の大切さ、少人数教育を重視、高度な英語教育を実践し女性の英語教員を養成することを語った。

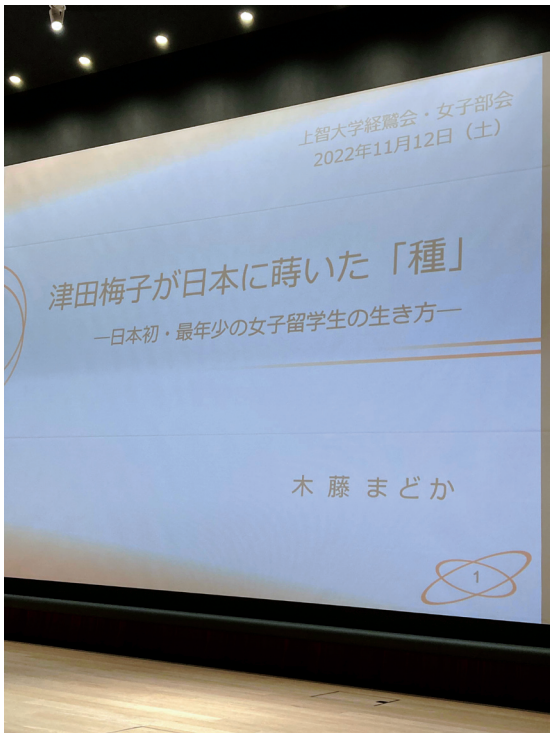
木藤の博士論文では、梅子の専門教育としての英語を「技術」として捉えている。木藤の博士論文では、女子英學塾・津田塾専門学校・津田塾大学の卒業生への聴き取り調査の結果を取り上げており、梅子が教壇に立っていた当時の教育方法が継承された指導法も紹介した。

最後に、この講演のタイトルでもある、津田梅子が蒔いた「種」として、女子英學塾を通して梅子が日本の女性の教育に残した成果に言及した。

1）現在の東京都新宿区
2）米国ペンシルベニア州，1885年設立
3）1933年ノーベル生理学・医学賞受賞

梅子は、all-round women ―高い専門性と広い視野を持つ個人―の育成を目指した。技術としての専門性の高い英語を習得することは、当時の日本においては、女性が専門職に就く足がかりとなるものであり、女性にとって、経済面の「自立」とともに精神面の「自律」につながるものであった。また、社会貢献への意欲、役割を果たす意識につながる「しごと」観、自律した学習者としての人間形成について言及した。

（津田梅子研究家・私立中高教諭）



経鷲会奨学生からの礼状

川島大輝（経・経 3年）

この度は、経鷲会研究奨励金の奨学生に選出していただきありがとうございます。

多くの素晴らしい学生が選出されている中で私のような不束者が選出していただいて良いものかと恐れ多く感じる一方で、このような形でこれまでの学業成績を評価していただいたことを大変嬉しく思うとともに、残り１年となった大学生活に向けてより一層身が引き締まる思いです。

学びを深める度、物事を眺める際の視点が増えていく感覚や、新たなアイデアを創造するための道具で自身のポケットが膨れ上がっていく感覚があります。そういった感覚を面白いと感じながら、私は学びを楽しんでまいりました。

そういった背景もあり、将来的には、社会問題を多面的に捉え、柔軟な発想で解決のための新たな仕組みを生み出すことのできる人間になりたいと思っております。

私の行動の一つひとつが多くの方のご支援の上に成立していることを忘れることなく、この先も精進していく所存です。

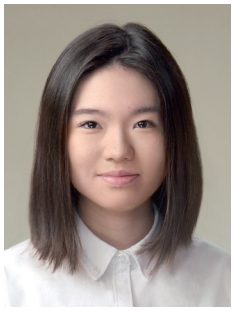
小林詩歩（経・経 3年）

この度は、経鷲会研究奨励金に採用していただきまして、誠にありがとうございます。このような大変光栄な奨学金を授与いただけることを誇りに思います。同時に、残り1年、身を引き締めて過ごしていきたいと思っております。

私は、勉学に励むと同時に、体育会フライングディスク部での活動に尽力し、今年度は、全日本大学選手権において全国9位の成績をおさめました。昨年度よりもコロナウイルスの影響が緩和され、声出しのできる環境での大会となり、チーム力を体感できる経験となりました。来年度も全国大会出場を目標に、日々の活動に励んでまいります。

今後は、奨学金をいただいたことへの感謝の気持ちを忘れず、ご期待に応えられるよう部活動と勉学の両立を図っていきたいと思っております。そして卒業後も社会に貢献できるよう、日々努力を続けていく所存です。改めまして、経鷲会研究奨励金を授与いただきまして、誠にありがとうございました。

涌井美怜（経・経 SPSF 3年）



Hello everyone.

My name is Mirei Wakui (Gan), and I'm currently a third-year student in the SPSF department of economics. I am incredibly honored to be here today and thank you very much for selecting me as one of the recipients of the Scholarship. I feel very privileged to receive your support in my post-secondary education endeavors.

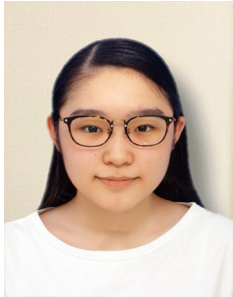
With the challenges that we are facing today in achieving sustainability in our society, I believe that education plays a critical role in transitioning and adapting the current and future generations to a more sustainable society. As such, support to students from the university and the alumni committees will allow students to be more motivated to achieve academic excellence and pursue their intellectual curiosity.

As I am almost reaching my final year at the University, I reflect back on the first two years when I started my University classes entirely online. Regardless of whether classes took place online or in person, the professors were extremely accommodating and their enthusiasm, as well as supportiveness, really helped me to stay motivated and enjoy the learning experiences at Sophia University.

I sincerely thank each professor, faculty member, and the alumni committee for selecting me as one of the recipients of the scholarship. I will continue to engage in my academics as a student of Sophia University and strive to do my best to enrich the experiences that I will gain throughout my remaining years as a University student at Sophia.

Thank you.

春原沙紀（経・営 3年）



この度は、経鷲会研究奨励金を授与いただき誠にありがとうございます。これまでの学業の成果が認められたことを大変嬉しく思うと同時に、今後もより一層勉学に励まねばならないと身の引き締まる思いです。

私は財務会計のゼミナールに所属し、会計情報を用いた企業分析の手法や国際税務について学んでおります。3年次には、日本の海運業界のビジネスモデルと将来性について、グループでの研究・発表を行いました。分析を進めていく中で、競合他社と共同で設立した合弁会社の存在や企業ごとのセグメントの違いなど、企業利益に関わる様々な要因が明らかとなり、企業が成長を続けていくことの難しさを改めて実感しました。そして学期末には、企業分析の成果を税理士法人の方々に発表する機会にも恵まれ、非常に貴重な経験をさせていただきました。

今後も周りの方々への感謝を忘れず、精進してまいりたいと思います。改めまして、この度は奨励金を授与いただき誠にありがとうございました。

湯浅雄太（経・営 3年）

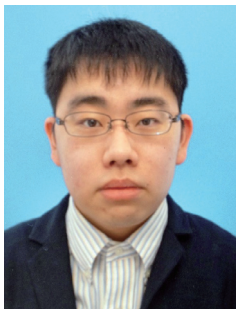
この度は、経鷲会研究奨励金に採用していただき、誠にありがとうございます。このような光栄な奨学金を頂けたこと、幸甚に存じます。

私は、経済学部の授業を通して様々なことを学び、課外活動という形でアウトプットしてきました。

現在は、株式会社あなたへこもれびの代表取締役 CEO として大学生の挑戦の支援をする事業を、NPO 法人 IHRP の理事として高校生の研究支援をするプログラムを司っています。こうした事業を運営できていることには、経済学部での学びからくるものがとても多いです。例えば、株式会社あなたへこもれびの事業の一つとして、下北沢に 500 円の学生ラーメン「いい夢見ろよ」を開店しました。この事業の中での店舗経営やマーケティングなどには授業で学んだ事柄が大いに役立っており、大変感謝しています。

経鷲会研究奨励金に採用いただきましたが、現時点をゴールとせず、今後とも学生の支援への取り組みに一層精進して参ります。今後ともよろしくお願いいたします。

柴田　峻（経・経 3年）



この度は、経鷲会研究奨励金の奨学生として採用していただきありがとうございます。

入学式もないままに始まった大学生活は抱いていた予想と大きく異なり、先の見えない不安や初めてのオンライン授業に対しての戸惑いを感じていました。しかし、少しずつ慣れていくうちに、このような事態において自分が学業を続けられているのは、大学関係者の皆様や先生方のご尽力によるものだということに気付きました。その中で自分にできることを積み重ねてきた結果をこのような形で認めていただきとても光栄に思います。研究奨励金は資格取得の勉強等に使わせていただきたいと考えております。

また、このような環境の中で様々な形でサポートをしてくれた家族や周囲の人々には本当に感謝しています。これからも今の感謝の気持ちを忘れずに、自分にできることを一つひとつ見つけていきたいと思います。

この度は誠にありがとうございました。

林　和哉（経・営 3年）

経鷲会と経済学部からこのような形で表彰していただきとても光栄です。

私は今年、上智大学を早期卒業して、海外の大学院でビジネスアナリティクスを学ぶ予定です。経営学科の講義ではマーケティングや戦略を学び、経済では計量的なことから、卒業研究を通して、データ分析や統計に対する理解を深めることができました。その中で、世界で自分はどう輝けるのかを真剣に考えるようになり、海外の大学院で学ぶ決断をしました。上智大学の経済学部という経営とデータ分析が交わった環境下で勉学に励めたからこそ、今見えている道に挑戦できており、上智大学での経験は人生の１つのターニングポイントであったと感じています。この３年間で、自分のなりたい姿や将来を見据えることができて、大きく人生が変わりそうなことにとてもワクワクしています。

サマーコースとして香港中文大学と合同で開講された講義など、上智大学では国際的なグループワークの場においてのリーダシップを考え実践する場が多くありました。振り返れば、経験･スキル･バックグラウンドが多様な友達や学生と学びを共にしながらお互いを尊重し、頼り頼れるチームを一緒に作り上げた時間は刺激的かつとても幸せな時間でした。多くの環境がオンラインになり、これからの学びのあり方が不確定な中で、そのような場所と時間を作り上げてくださった教授や関係者の皆様にとても感謝しております。

コロナ禍で始まった激動の大学生活はあっという間であったと感じています。このように最高な環境を提供してくださっている教授、教職員、その伝統をこれからも守り続けてくださる経鷲会の皆様への感謝を忘れず、皆様のご期待を上回ることができるよう一生懸命生きていきたいと思っています。今回、これまでの成果を経鷲会と経済学部からこのような形で表彰していただき、ありがとうございました。

※「経鷲会研究奨励金」と「経済学部・経鷲会奨学基金」の両方を受賞

経鷲会の今後の予定です。多くの方々のご参加をお待ちしています

○５月28日（日）開催のASFは、対面とオンラインのハイブリッド開催となります（https://www.sophiakai.gr.jp/）

経鷲会では、ASFの企画として、大松染工場の協力で、伝統工芸染色体験講座を開催します（11時～15時）。講座内容については12頁をご参照ください。ご参考までに2019年５月に行いました大松染工場での染色体験の写真を掲載します。多くの方にご参加いただき、好評でした。

（大松染工場HP　https://edokomon-daimatsu.com/）

○日銀貨幣博物館見学ツアーを開催いたします

日時：６月10日（土）午前10時30分　現地集合（予定）
会場：日本銀行金融研究所貨幣博物館
（所在地：東京都中央区日本橋本石町1-3-1
https://www.imes.boj.or.jp/cm/）

○女子部会勉強会（講演会）を開催いたします

日時：７月22日の予定です。開始時間は未定です。
会場：大学の教室にて行います。教室は未定です。
講師：ファームサポート千葉合同会社　代表　金丸　博子　氏

○その他（日時未定です）

・佐野市立吉澤記念美術館　見学ツアー
・古典芸能鑑賞会
・都内散策ツアー

《今後の予定につきましては、経鷲会メールニュースでお知らせいたします》

経鷲会ゴルフコンペ

濱口敏行（1967年 経・経）

3月20日、藤ケ谷カントリークラブでの恒例の経鷲会ゴルフコンペに、9名の方々が参加し、3組でプレーしました。とても楽しいゴルフ会でした。

といっても私は、金の台での経済人倶楽部のゴルフコンペは毎年出ていますが、経鷲会のゴルフコンペは初めてです。もう80になるのですが、なんとかもう少しゴルフをまともになろうと、このところ出られるコンペにはできるだけ参加しています。

私どもは、1988年上智大学75周年の時に、経済学部の卒業生の集まりである経鷲会を結成し、当時私は、会計担当だったのですが、もう35年前の事です。

今は大学も学部学科同窓会を組織化し、活動の活発化に努めており、経鷲会はその模範です。長い間在校生の奨学金としての研究奨励金を出し、そして他にも様々な活動を活発にしておられます。ゴルフ会もそのひとつでしょうが、長く続けておられる事に意義があると思います。

これからも若い世代の方々の力で、さらに大きく育ててください。

とても楽しい一日でした。

今年の「ASF」も楽しい企画で！

昨年のASFでは、来場いただいた卒業生やメールでご参加いただいた卒業生に、『想い出落書き帖』づくりにご協力いただきました。完成品（A4版）はソフィアンズクラブ（6号館6階）に置いてありますので、お持ちでない方は、自由に手に取って昔のソフィアを懐かしんで下さい。

今年は、『親子で楽しむ伝統工芸（江戸小紋・江戸更紗染め）体験』を計画しています（場所は1-101教室の予定）。墨田区の大松染工場から、伝統工芸士にいらしていただき、江戸小紋・江戸更紗の“染め”に挑戦いただく企画です。伝統工芸士による対面での丁寧なご指導ですから、素人でも、子供（年長さんから）でも、お年よりでも、安心してご参加いただけます。息を凝らして手と心を合わせ、ご自分のセンスで染めあげた完成品はお持ちいただきます。

挑戦する製品は、①テーブルセンターと②トートバッグの2種類、型紙（デザイン）は、専門家制作ですが、ご自分の感性で染めに挑戦します。材料費（①は600円、②は1200円（予定））のみお願いいたします。

予約は不要ですが、材料がなくなり次第、終了とさせていただきます。

お問い合わせは、jfukuda1308@ybb.ne.jp（福田）まで。

エコノミアン編集雑記　『ソフィアの鷲 その⑩』

今年も学部の学生7名に研究奨励金を贈呈することができました。ご寄付くださいました経鷲会の皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

この7名は3年生ですが、入学時からコロナ禍でした。ほぼ2年間以上リモート講義が主体だったと思いますが、ちょっと我々の世代だとそのような学生生活は想像がつきません。相当な努力をしたのだと思います。

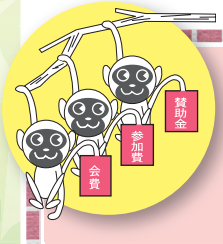
ソフィア会のホームページによると、2月に金祝、パール祝、銀祝、銅祝の各式典および懇親会が3年ぶりにリアルで開催されたとのことです。また、ソフィア会と大学との共催の「経営者に聴く」シリーズの講演会もリアルで開催されています。ASF2023も一部制限はあるものの昨年同様に大学構内で開催される予定です。大学のホームページによると、学位授与式も東京国際フォーラムにて開催されたとのことです。

大学の講義も昨年から対面での開催となり、体育会のクラブ活動も昨年から通常通りに再開されていたようです。

このように大学の機能はほぼ通常に戻っています。しかし、この3年間は非常に長く感じました。

上智学院は、「上智学院グランド・レイアウト2.0」を策定し、2023年度が最終年度となります。（GL2.1に改定済）コロナ禍の諸制限が緩和されて、大学も学生生活もほぼ正常に戻りつつあり、グランド・レイアウトも大きな成果をもって完結し、また新たな飛躍した上智大学をOBに見せてくれることでしょう。

（編集担当　大武宏至（1978年経・営））



－年会費納入のお願い－

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。

会費を納入頂いた方には、母校近辺の風景写真のはがきでお礼を申し上げております。転居による住所の変更やメールアドレスを変更された場合は、上智大学ソフィア会事務局にお知らせ下さい。

連絡フォーム　https://www.sophiakai.gr.jp/form/fid_47.html